

- ① 昭和三十七年十一月、日本近世文学会第二十三回研究発表会で、新資料の発見を報告。拙稿「西鶴文学地名考—『腕久一世の物語』—」（『研修』第九号）に収めた。
- ② 「腕屋の蒲鉾」は、腕屋の末裔江嶋伊兵衛氏の手紙に、「『わんや』が三代以前は、大坂備後町にて有名なる蒲鉾屋なる「腕屋」でありし事は拙家の書類にも有之、多分その事なるらん」と存申候。」（三田村鳶魚編『西鶴輪講』二五二頁）とある。
- ③ 「腕久が家は、京橋筋一説に大手筋にありしといふ。今その迹不詳。」
- ④ 「伝云腕屋久右衛門ハ大坂大手筋に住せしとぞ其旧跡今詳ならず」
- ⑤ 「浪花に其名高かりし船場堺筋腕屋久右衛門が一子久兵衛後世に腕久といふ或説にその家は追手筋なりしといへど旧趾詳ならず」
- ⑥ 「大坂の腕久といへるをのこは錦町の住人にて」
- ⑦ 「腕屋久右衛門は浪華御堂前の豪商にして古き家とぞ旧趾今詳ならず」
- ⑧ 伊原敏郎『歌舞伎年表』第一巻（一五八頁上段）
- ⑨ 「腕久が寄附せし石の手水鉢（略）腕屋久右衛門寄進の数ヶ字を刻す」
- ⑩ 『愚雑俎』前集巻之一・『伝奇作書』続編の上巻・『撰津名所図会大成』巻之二など。
- ⑪ 大和屋甚兵衛の「腕久」劇の大坂初演を滝田英二氏は、「私の推定では、貞享初年に作られたものではなかったかと思つてゐる。」（『元禄期の世話狂言に就て』、『演劇史研究』元禄

劇篇』（四一頁）と述べておられる。これについて野間光辰氏は、「貞享初年—恐らくは貞享元年の顔見世に道頓堀で上演せられた」（『西鶴と西鶴以後』）「岩波講座『日本文学史』第十卷」（二二頁）ものとしておられる。

## 現代文の成分族構造

### 一 はじめに

本稿の目的は具体的な現代日本文を構成する大小各種の成分族構造を後述の方法に従つて素描するところにある。

成分族と云ふ語は「文法の構造」(“Syntactic Structure” N. Chomsky 著、勇康雄訳)の句構造 (=Phrase Structure) と云ふばあいの句に対応するものである。

### 二 文構造把握のたちば

まず、一般に文の構造といったばあは、それはどのような構造として把握すればよいのか。

フランスの数学者集団ブルバッキは無数にある構造を次の三種に大別するという。（『図説科学大系10、数・空間・時間』）

- 代数的構造
- 順序的構造
- 位相的構造

この分類に従えば、文は線状的な性格をもっているから、直線の

構造がそうであると同様、順序的構造の一つとして位置づけることが出来そうである。

だが、ここでは更に、それがいかなるものによる順序的構造なのかを想定しておくのがよいかと思う。それで今、文の構造を言語学の一般通念に従つて次のように仮定しておく。

文はいずれも有限種の成分族による順序的構造である。

「成分族」は集合論上の用語「集合族」に対応させたものであって、従来の、いわゆる「文の成分」とは具体的内容を異にする。ちなみに、集合族とは「一般に、その元がすべて集合であるような集合」（赤根也著「集合論入門」）のいいである。従つて、文そのものも一成分族ということになる。

### 三 文の分析・構成のプログラム

さて、文をどう仮定したところから、文の成分族への分析、分析の結果得られた成分族による文構成の可能性が生じてくる。そこで以下、分析および構成のプログラミングに移ることにする。

佐 伯 哲 夫

今日の電子計算機による演算は二進法によって遂行されるが、そのうち判断をともなう演算(論理操作)には次の二種があるという。

直列方式 用意された質問が一つずつ逐次提出され、それに対する答えが、これまた一つずつ逐次提示されていく。すなわち、質問とそれに対する答え、イエス(1)ノー(0)のくり返し差によって各性格の差異を検出する。

並列方式 用意された全部の質問が一時に提出され、それに対する答えが、これまた一時に提示される。そして各質問の答え、イエス、ノーの組み合わせ差によって各性格の差異を検出する。

いずれの方式を採用しようと質問形式が同じならば最終的には同じ結果に至るが、これら二つの方式は文から成分族への分析操作にもあてはめることが出来る。ただ、ここでは直列方式を主、並列方式を副として採用する。直列方式を主として採用する理由は分析過程における制御に都合のよいこと、図示に便利なこと、二つの理由による。

ところで、構造言語学の採用する手段に直接構成要素分析(Immediate Constituent Analysis)とおきかえ(Substitution)がある。さいわい、前者は直列方式であり、後者は並列方式である。そのため、以下、直列、並列の呼び名にかえてこれを用いることにする。

直接構成要素分析は一定の質問とそれに対する答え、イエス、ノーのくり返しによって分析をすすめ、各構成要素の性格を明らかにしていく操作であるが、ここではその質問形式を次のように一定する。

次に、二つの直接構成要素であるが、ここで特に「二つの」と限定するのは、黒田成幸氏の述べた「実際多くの場合がそうであるから」「(言語の記述)」という現実的理由のほかに、電子計算機の論理操作を援用することによって各成分族の性格をより明確にしているという論理的意図によるものである。

他方、おきかえは同じ言語環境にたちうるすべての言語形式を同類の成分族としてまとめていく操作であるが、このうち言語環境は二つ以上にわたる言語形式の先後関係によって規定される。そして、その先後関係を支えるものはその言語社会に慣習としてある語順傾向である。そこで、この規定にあたっては、さきの語順公理Iと、新たに語順公理II、

前にくる文節成分族ほど後の成分族にまでかかっている。に従うことにする。文節成分族とはハシモト単位から成る成分族のいいである。なお、公理IIを併用するのはかかり文節相互の不整語順を防ぐためである。

さて、こうして規定された言語環境は、分析によって得られた各成分族の、同類であるか否かの検証すなわち分類と、その検証にもとづく分析操作の簡易化に活用することとなる。

以上、分析プログラムの要点を述べたが、このプログラムに従って分析操作をすすめる前にもう一つ、成分族類の最終的な総合構成形態を次のように予定する。

現代日本文に現われうる一切の成分族類を内含する、しかも最も単純な形態の文

当レベルにおいて、その成分族類は語順公理Iによって二つの直接構成要素に分析されるか。

ここにレベルというのは分析レベルのいいであって、一レベルは△分析対象の提示↓質問の提出↓解答の提示↑分析作業↑成分族類の認定√の連鎖から成る。ただし解答提示のところでノーの出たばあいは分析作業をとはしてただちに成分族類の認定にはいる。そのばあいの成分族類認定は分析対象提示前の成分族類認定と変わりないから、分析図ではそれが前次レベルに書き入れられることになる。ついで、語順公理Iとは

かかりはうけの前にくる。という現代日本文におけるもつとも強力な語順傾向をもってするものであって、ここではこれが分析操作の形態を制約するものとなる。このような語順公理などというものをもって分析形態を制約するのは、一に文を順序的構造と仮定したことによる。なお、公理は「他の推理・判断・結論の基礎となる根本的仮定。」(「明解国語辞典」)の意に用いる。

ところで、今ここに公理としたもの内容、すなわち、何がどこにまでかかり、何が何をうけるのかの関係は相対的な意味関係である。そして、この相対的な意味関係の語順支配は、たとえば「トキ↓ヒト↓トコロ↓モノ↓サマの順に並ぶ。」(拙稿「現代文における語順支配の論理」国語学50)といった絶対的な意味関係の語順支配と対称的である。いずれにせよ、現代日本文においては「Bloomfield 以来のアメリカ構造言語学の採用する公式的な仮説の一つ「位置」機能」はむしろ「位置」意味」におきかえた方がいいくらいのものである。

これは具体的な現代日本文を分析した結果得られる一切の成分族類をもつて構成されるべきものであるが、「一切の成分族類を内含する」という予定は以下に述べる分析操作を制御する。制御は主として分析対象としての、具体的成分族例の取捨、分類操作の挿入という形をとる。

ついで構成プログラムであるが、これは分析操作の逆をたどることによって、すなわち最多分析レベルにおける成分族を出発点として少次レベルへ逆行し、最終的には今述べた最も単純な形態の文に構成する。そして、その過程の、レベルごとの成分族構造を明らかにしていくのである。

構成プログラムが逆分析プログラムであることからこれ以上は述べない。

#### 四 分析操作の骨格

プログラミングの要点を述べてきたが、うち分析プログラムに従って行なう分析操作は外的分析と内的分析の二層に分ける。このばあい、外的分析によって得られるそれを外的成分族、内的分析によって得られるそれを内的成分族とよぶことにする。

活用の方は今しばらく奥津敬一郎氏に従って(「『ダ』で終る文のノミナリゼーション」国語学56)、その形態差は音韻的なものであって文法的なものではないとの見方をとる。

さて、外的分析は文分析、不定節分析、不定亜節分析、不定用句分析の四層から成る。このうち不定亜節分析によって得られる成分



「立派」類名称句——連体辞「な」

「の」系名称句とは「私の・少しの・ピカピカの」の「私・少し・ピカピカ」のように「の」の前に立つ名称句をいう。後者を「な」系名称句としないのは、「立派」同様「な」の前に立つ「よう」「そう」の類を欠くからである。「よう」「そう」の類はここには現れない。

主句はこれら連体句を一直接構成要素として成立する。機能は名称句相当である。

主句名詞句

連体句構造の差を考慮の上、主句例をあげてみる。

- 0、そんなこと
- 1、山の+宿・機関銃の+よう、真直ぐな+煙

ここに位置する名称句は大部分、連体句内の名称句と一致するが、連体句の直接構成要素となる、いわゆる形容動詞語幹の類はここに位置しないし、逆に、ここに位置する「よう」の類は連体句の直接構成要素とはならない。また同じく「よう」の類は連体句1とは自由に文脈を共にすることが出来るが、連体句とは必ずしもそうはいかない。

なお、「そう」は後述の不定用句（構造単純）ないし主節（構造複雑）とでなければ直接構成要素とはならない。連体句に相当するのは不定用句であるとして次に各文脈選択ルールをあげる。

- 連体句——「の」系名称句
- 連体句1——「の」系名称句
- 「よう」類名称句

不定用句——「の」系名称句

不定用句より連体句の方に重点をおいて、しかもここにあげた成分族のすべてをおおおうような形で主句モデルを構成すれば、次の四種にならうか。

- 1、あらゆるb
- 2、aのb
- 3、aのよう
- 4、aがxしたそう

4の「aがxした」は不定用句をあらわす便宜的なものである。主句を直接構成要素の一つとして成立する不定用句の構造にうつる。機能は名称句相当である。

不定用句——卓立句

卓立句は「ちようど・まるで・あたかも」のように名称句「よう」と呼応するもの、「なぜ・どう・果して」のように名称句的文節接尾辞「か」と呼応するものを包含する。

まるで+十人魚の+よう  
「まるで」と「よう」の間には連体句1か不定用句のくるのがふつうで、ゼロの連体句がくるのは談話文のばあいであって、しかもそれは語彙的に限られる。

- あたかも+その+よう
- この文脈選択ルール
- 「まるで」類卓立句——連体句1
- 「よう」類名称句

なぜ+好きか

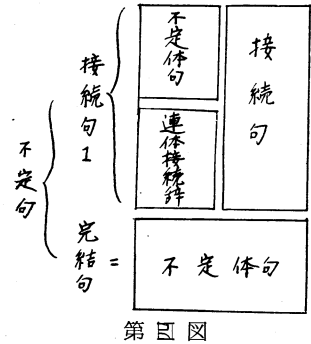
「好きか」は不定用句の直接構成要素であって、連体句1の直接構成要素とはならない。また「なぜ」は「か」と呼応するが、間に不定用句をはさんでもいいし、はさまなくてもいい。この文脈選択ルール

「なぜ」類卓立句——か

- 不定用句モデルを作っておく。
- 1、あらゆるb
- 2、aのb
- 3、まるでaのよう
- 4、aがxしたそう
- 5、なぜaがxしたか

以上みてきた不定用句はこのままで接続句となることがある。接続句または完結句の前に立つばあいである。

不定用句構造



第 四 図

部分構造としての接続句構造は次の二種である。

- 0、接続句——接続句
- 1、接続句1——不定用句
- 2、接続句——不定用句
- 3、あるいは・または・および
- 4、年上の男+と・まるで

ような不幸+や（不定用句+連体接続辞）

連体接続辞が「の」系名称句を直接構成要素とする不定用句に接続することについては比較的自由だが、「な」系名称句を直接構成要素とする不定用句に接続することについては語彙的に限りがある。

不定用句——接続句

接続句構造の差を考慮の上、不定用句をあげてみる。

- 0、あるいは+まるでそれが自分に向かって言われているみた
- 1、私たちの仲のよさへの安心と+それから来る喜び
- 2、何故私があなたのために御飯を作るか+何故あなたが私を作った御飯を食べるか
- 3、あるいはB
- 4、あるいはAとB
- 5、A、B

このA、Bにさきの不定用句モデルが代置されるのであるが、不定用句モデルのうち4、それにつぐ3は代置が常に自由とはかぎらない。

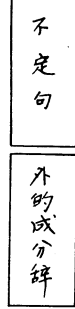
以上の不定用句は内的成分族であるが、これはこのままで外的成分族となることがある。一つは述辞「だ・です・だろう・らしい」などの直前に位置したばあいの述句であって、これは不定用句最末の名称句に意味の制約をうけない。他は中核主節の前に位置したば

あいの卓立亜節であって、これは不定句最末の名称句がトキを意味するものに限られる。つまり同構造であるが、位置と意味が異なるのである。

あるいは、信じようとしたばくらの努力の空しさをはっきりさせること(十述辞)

共産党の第六回全国協議会の決定で軍事組織が解体され、佐野たちが大学に戻った時(十中核亜節)

これら不定句を直接構成要素の一つとして成立する外的成分族構造



第 五

卓立辞は「は・も・こそ・さえ・しか・に」等を包含し、補足辞は「が・に・を・へ・と・から・より・で」のような、

いわゆる格助詞、「ほど・だけ・くらい・など・まで」のような、いわゆる副助詞を包含する。

卓立亜節(不定句) 補足句(不定句)

副社長が思い起こすのは(卓立亜節)

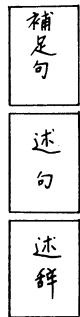
冷静な君十が(補足句)

以下の成分族はすべて外的成分族を直接構成要素として成立する。

不定用句構造

部分構造としての主用句構造

主用句(補足句)



第 六

補足句は次のようなものを包含する。  
私が病院にいた時に(トキ)  
自分たちが(ヒト)  
殆ど陽気にさえしやべ

りつづけるみなの前で(トコロ)  
優子の死を(モノ)

それほど・一回・大へん・ざわざわと・悲しく・綺麗に・その雰囲気は堪えきれぬように(サマ)

これらが同一文内脈にあらわれるばあい、大体右にあげた順に並ぶのであるが(これ以外に、出発↓中途↓帰着の順に並ぶ、とか、意味量の小さいものは後にまわる、とかいった論理に支配されるばあいがある。)、それにしても、これらが語順上、連続するのがふつうであること、いずれも述句にかかっているのが妥当なことから同一成分族とみなすのである。

他方、述句は次のようなものを包含する。

行かせる・飛ばれる・広い・気楽・快活さ・同じようなもの  
「せる・れる・たい」は補足句がここままでかかっているといふのが妥当なところから接尾辞とみなす。

主用句例

お母さんが十言っている(補十補十述)

以上の主用句を直接構成要素として不定用句が成立する。ただし、構成操作の短絡を行なえば、これが中核亜節ということになる。

不定用句(主用句)

述辞は次のようなものを包含する。

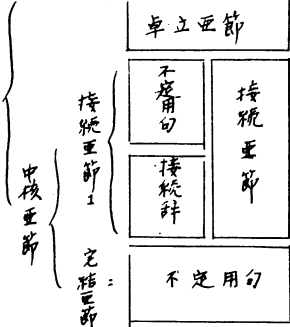
だ・の・だ・なのだ・で・である・ない・です・ます・らしい・た・だろう・う(よう)・まい

不定用句例

そうした不安と失望感の意外な重さが、私に電話をかけたせになかった(主用句十述辞十述辞)

「泥棒！」という呼びかけ文と「泥棒だ！」という判断文の相違はこの文脈選択ルールが見いだすはずである。不定用句はこのままで接続亜節1になることがある。

不定亜節構造



第 七

部分構造としての接続亜節構造には次の二種がある。

0、接続亜節——接続

1、接続

接続辞には「が・けれど・から・し・ので・の・に・と・て・ば」等、いわゆる接続助詞が包含さ

れる。接続亜節例を構造別にあげる。

- 0、だが・しかし・すると・そして・それで・つまり
- 1、いつまでたっても来ない節子を待っている十と
- 1、その沈黙を、ごうっと、都電の音が横切って行き、

接続亜節は完結亜節(〳不定用句)とともに中核亜節の直接構成要素となる。

中核亜節(接続亜節)

中核亜節例を、接続亜節構造を考慮の上あげてみる。

0、そして十一夜の雨風に散ってしまうのだ

1、最後の「さようなら」という言葉を、投げ去るように言う  
と、+私の返事をまたずに電話を切った

この中核亜節は卓立亜節とともに不定亜節の直接構成要素となる。

不定亜節(卓立亜節)

卓立亜節は次のようなものを包含する。

気持は・神戸にも・原爆が落とされて後・もし・多分・寶石しか・不思議なことに

これらを等しく卓立亜節とするのは、これらが語順上連続群をなすこと、この一群がすべて述辞を中心にかかっていることとみられることとの二つの理由による。

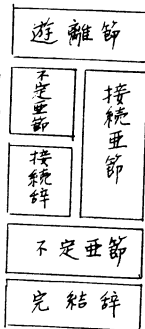
これらのうち「もし・たとい」の類は後述する主亜節の直接構成要素としての接続亜節にはあらわれうるが、完結亜節にあらわれえない。

不定亜節例

下宿の女関に立った時、+朝食の仕度をしていたその主婦が私を呼びとめ、一通の速達を渡した

不定亜節はそのままで主亜節の直接構成要素としての接続亜節となることがある。

不定節構造



第八 図

部分構造としての接続  
 亜節1と、さきほどのそ  
 れと比較してみると、こ  
 れには卓立亜節の加わっ  
 ていること、それだけの  
 違いである。これは完結  
 亜節についても同様であ  
 る。

主節例

着いた日はボートで

湖に出たが、+高原の水面を渡る風は、まだ頬を切るように冷  
 たかった

主節は主亜節を直接構成要素として成立する。

主節 / 主亜節

完結辞は次のようなものを包含する。

な・ものか・かしら・の・け・さ・とも・や・なあ

主節例

そんなはずない+わ

不定節は、この主節と遊離節とを直接構成要素とする。

不定節 / 遊離節

遊離節はいわゆる感動詞の類を包含する。

おや・あれっ・もしもし・はい・おはよう

不定節例

ねえ、+私たちって、間違っているのじゃないかしら

最後に文構造



第九 図

不定節を言語成分とすれ  
 ば、終止符は言語的成分と  
 も言うべきもので、これに  
 は次のようなものが包含さ  
 れる。!・?・

文例

やろうと思ったことはやるの+!

以上とりあげてきたのは、すべて表記される成分族としての主成  
 分族ばかりであるが、談話には更に、次のような副成分族を必要と  
 する。

エート・アー (詞的)

ネ・ナー・ダネ・デスナー (辞的)

六 今後の問題

以上、現代文の成分族構造を、主として構成の面からながめてき  
 たが、現代文の構造を明らかにするためには、なお変形構造の解明  
 整理が必要である。しかし、それも最終的には文脈変更ルールとし  
 てまとめあげられるべきものであって、そのためにはなによりも文  
 脈選択ルール (統計的な確率も顧慮した) の整理が急務ということ  
 になる。(一九六四・八)

(注)

引例は「されどわれらが日々」(柴田翔)から借りたも  
 のが多いが説明の便宜から改変したものがかなりある。

(付記)

本稿を成すについては第一回(昭和三十八年)下中科学研  
 究助成金の交付に負うところが大きい。

(追記)

一部、文脈選択ルールをとりあげたが、これについては別  
 に「名詞相当の構造」としてまとめざるつもりである。